
2010年度は夏期に野外キャンプ、冬期にまなびの会という勉強会を行った。

帰国渡日児童生徒つながる会

第1章 プロジェクトの概要など

1. プロジェクト名称、目的など

「帰国渡日児童生徒つながる会」

帰国渡日児童生徒つながる会は、京都に点在する国際結婚の家庭に生まれた子どもや、在日外国人、帰国児童生徒などさまざまな形で「外国につながる児童生徒」を対象に、集まり活動することでその子どもたちをつなげていくとともに、その子どもたちの持たせがえのない個性に誇りを持てるような場を提供することを目的として2008年度よりe-projectを利用し活動を続けている。つながる会の活動は主に一年を通して春と夏の2回、各数日間行っており、それに向けて週一回程度ミーティングを行っている。つながる会の活動をより多くの海外にルーツを持つ子どもたちに知ってもらうため、活動日の1・2カ月前にはチラシと申し込み用紙を作成し、京都府内の中学校に郵送している。

つながる会を知り、来てくれる参加者の多くは中国にルーツを持つ子どもたちである。参加者は長い間日本に住んでいる、あるいは生まれ育ったという子どもから、渡日して間もない子どもまでさまざまである。そのため日本語がそれほど得意でない子どももいるが、日本語も中国語も話せる子どもやつながる会の留学生スタッフが通訳をし、コミュニケーションをとりながら活動をしている。

2. 代表者および構成員

・代表者

安福 佳奈 国語領域専攻 3回生

・構成員

シゲンギン 教育学専攻 4回生

永安 聡子 国語領域専攻 3回生

靱山小奈津 国語領域専攻 3回生

森川みど梨 国語領域専攻 3回生

山本 舞 国語領域専攻 3回生

南 侑樹 英語領域専攻 3回生

趙 千慧 教育学専攻 2回生

原田 裕 国語領域専攻 2回生

日下部真衣 国語領域専攻 1回生

口石 梨絵 国語領域専攻 1回生

児玉 萌 国語領域専攻 1回生

宮側由加里 国語領域専攻 1回生

劉 飛亜 教育学専攻 1回生

3. 助言教員氏名

浜田 麻里先生 (国文学科)

第2章 内容や実施経過など

1. 夏の活動について

(1) 野外キャンプを企画するまでの経緯

昨年度までの取り組みの成果として、つながる会の活動に毎回参加するリピーターが増え、つながる会での交友関係ができ始めた。それだけでなく、つながる会のリピーターが自分の知り合いを連れて来るようになり、参加者の人数が増えてきた。さらに、つながる会の活動をチラシで知り、単身で参加したいという日本に来て間もない生徒も増えてきた。このような中で、参加者の言語能力や文化の違いを以前よりも念入りに考慮し、活動を計画する必要が出てきた。すると、

1日の活動だけでは時間が足りず、充実した活動をすることが難しいのではないかという声が構成メンバーの中からあがった。そうしたことから本年度は1泊2日の宿泊体験(夏のキャンプ)を通して、参加者の心をつなぐ活動を企画することにした。

(2) 夏のキャンプの目標と準備経過

【活動目標】

一泊二日のキャンプを通し他の参加者と活動を共にすることで、相手と自分の魅力(いい所)を知る。

【目標の設定理由】

キャンプを通しお互いのいいところを見つけることで、自信を持ってこれからの生活を送ってほしいという願いからこのような目標設定にした。

【実施内容】

具体的な活動内容としては以下のものを設定した。

- ・野外炊飯
- ・キャンプファイヤー
- ・オリエンテーリング
- ・まとめの活動

まとめの活動につなげていけるように、各活動のなかでさらに小目標をたて、内容を決定していった。

【日程】

8月8日(日) 事前活動

8月20日(金)、21日(土)

1泊2日のキャンプ

【場所】

京都市野外活動施設 花背山の家

【具体的な準備日程】

- 5月 活動目標、内容、日程決定
借り上げバス予約
- 6月 花背山の家電話連絡
打ち合わせの日程決め
チラシ印刷
チラシ作り・発送
- 7月 花背山の家と打ち合わせ
下見・予行練習
- 8月 直前ミーティング・しおり作り
事前活動
直前ミーティング
買い出し

(3) キャンプの内容

【参加児童生徒数】

20名

〈つながりのある文化による内訳〉

中国 17名

米国 3名

【タイムスケジュール】

8月8日

- 13:00 京都教育大学 スキル室集合
- アイスブレーキング
- 13:45 野外炊飯の話し合い
- 16:05 休憩
- 16:20 キャンプ当日の確認
- 17:00 解散

8月20日

- 11:00 京都教育大学集合・出発
(借り上げバス)
- 13:00 花背山の家到着
オリエンテーション
昼食
- 15:00 野外炊飯開始
- 18:50 野外炊飯終了
- 19:00 入浴

- 20:00 キャンプファイヤー開始
- 21:00 キャンプファイヤー終了
- 22:00 消灯・就寝

8月21日

- 6:00 起床・身辺整理
朝食準備
- 7:30 朝食
- 8:30 清掃
- 9:30 オリエンテーリング
- 12:00 昼食
- 13:00 まとめの活動
- 14:00 まとめの活動終了
花背山の家の方に挨拶
- 14:30 花背山の家出発
(借り上げバス)
- 16:30 京都教育大学到着
解散

【各活動の目標及び内容】

野外炊飯

【目標】

グループで協力して料理を作り親睦を深める。また、料理を作っていく中で自分のルーツに触れる。

【目標設定の理由】

初めて参加する子どもも何回か来ている子どもも一緒に料理を作ることで、コミュニケーションをたくさんとり親睦を深めることを期待し設定した。また、今回は餃子や中国の鍋料理を作るグループもいるため、活動の中でルーツに関する話や家庭の話をしていき、次のキャンプファイヤーにつなげていけるようにした。

【内容】

《事前活動》

各グループで作る料理の話し合い。
材料や手順の打ち合わせ。

《当日》

グループごとに料理を作る。

- ・餃子
- ・ハンバーグ
- ・焼鍋
- ・チキンのトマト煮



餃子作りの様子



ハンバーグを焼く様子

キャンプファイヤー

【目標】

自分のことを話すことによって自分を見つめ直す。また、相手のことも知る。

【目標設定の理由】

つながる会には自分と同じような状況にいる子どもたちが集まってくることから、普段学校では言えないような悩みや思いを自分の伝えやすい言葉で言いやすい環境だと考える。このような場で、子どもたちが思っていることを口にする事で何らかの気持ちの整理ができ、また友達からの言葉によって前向きな気持ちを持つ、自分について見つめ直す、お互

いに認め合い子どもたちの関係が深まる、といったことなどを期待し、このような目標設定にした。また、わたしたちスタッフも子どもたちからの言葉を聞き、外国にルーツのある子どもの実態理解や更なる企画の充実を図りたいと思ったことも目標設定の理由の一つである。

[内容] (1時間)

- ・歌「燃えろよ燃えろ」(日本語で一番だけ歌う)
- ・チェッチェッコリ
- ・マイムマイム
- ・30秒ゲーム
- ・スタッフの話
- ・ルーツについて話す(日本に来てうれしかったことや困ったことなどの話、学校や家庭での生活など)
- ・まとめ

オリエンテーリング

[目標]

まとめの活動で書く友達のいいところを発見する。

[目標設定の理由]

様々なレクリエーションをチームで取り組む中で、他と関わりを持ち、他に興味を持ち、他の素敵な所「魅力」に気づく。以上の理由でこの目標を設定した。

[内容] (1時間)

- ・風船運び
- ・落ち葉集め
- ・木は何メートルかな
- ・写真をとろう
- ・似顔絵を描き合おう
- ・ポージングゲーム
- ・豆運び

以上のレクリエーションを花背山の家にあるオリエンテーリングコース上に設置

し、子どもたちを3~4人のグループ(全5グループ)に分けて、オリエンテーリングを行った。その際、子どもたちに地図を配った。



スタッフの出す問題に子どもたちが答えている様子

まとめの活動

[目標]

友達の魅力を発見し、相手に伝える。また、自分の魅力にも気付く。

[目標設定の理由]

友達の魅力に気付き、また友達から自分の持つ魅力や良いところを言ってもらうことで、自分の素晴らしいところを認識し更にそれを自信につなげてほしいという理由からこの目標を設定した。

[内容]

四つ切の色画用紙に自分の名前を書き、それとは別のA6ほどの大きさの色画用紙に子どもたちがキャンプを通じて知った友達の魅力や良いところを書いた。一人当たり4人に書いた後、他にも書きたい人がいれば書いてもいいことにした。最後にメッセージをまとめて四つ切の色画用紙に貼り付け、子どもたちに渡した。



メッセージを書いている様子



出来上がったメッセージカードを渡している様子

2. まなびの会について

(1) まなびの会の内容

まなびの会は学校の勉強を通して、日本語の学習・支援をしていく勉強会のことである。子どもたちだけでなく、スタッフもこの会を通してまなびの多い会にしたいと思い、命名した。この会を企画するに至った理由は、夏に一泊二日のキャンプを行った際、日本語が不得意なために学校の勉強に困難を抱えているという参加生徒の声が多かったため、何か支援できないかと考えたからである。

【日程】 2010年12月25日(土)
26日(日)

【場所】 京都教育大学 A1, A2 講義室

【具体的な準備日程】

10月 活動内容、日程、決定

11月 「まなびの会」ネーミング決定

参加募集チラシ作製、発送
12月 事前研修

(2) まなびの会当日について

【参加生徒数】

10名

〈つながりのある文化による内訳〉

中国 8名

米国 2名

【タイムスケジュール】(両日)

10:00-10:50	1時間目
11:00-11:50	2時間目
11:00-13:00	昼休憩
13:00-13:50	3時間目
14:00-14:50	4時間目
	解散

勉強会には参加者に各自で冬休みの宿題や受験勉強などの用意を持ってきてもらい、各教科の勉強をしながらその中でも専門的で理解しにくい日本語をサポートするといった形をとった。

第3章 結果や成果など

1. 夏のキャンプの結果

(1) 活動ごとの結果

野外炊飯

事前活動では子どもからの意見は少なく、調べてきてくれている子どももほとんどいなかった。スタッフが話し合いに関わりすぎて、子どもたちで考える様子が見られなかった。なかなか意見の出ないグループもあり、飽きてしまう子どももいた。

野外炊飯では、初めて体験する子どももいて、楽しそうに作業する子どももいた。作業時間が長くなると、飽きて遊びに行ってしまう子どももいたが、スタッフと一緒に調理する子どもや、火加減を

ずっと調節する子どももいた。後半では協力して調理をするグループも見られるようになった。

キャンプファイヤー

キャンプファイヤーをするのが初めてだという子どもが何人かいたため、始まった時は全体的に少し堅い雰囲気であったが、キャンプファイヤーの火がなかなか燃えなかったこともあり、一気に和やかな空気になった。火が燃えるまで流れを変更して「マイムマイム」「チェツェッコリ」の順で行った。内容が対象とする中学生に合っていなかったのか、なかなかやろうとしない子どももいたが、楽しそうに踊りやゲームをしている様子が見られた。

ルーツの話の時には二人の子どもが自分の学校生活のクラブ活動や勉強面で悩んでいる、といったことを全体の前で打ち明けてくれた。二人ともつらいこともあるがこれからも頑張っていきたい、という前向きな言葉で自分の話を締めくくっていた。周りの子どもたちも静かに二人の話を聞きながら、何か思い出したり考えたりしているようだった。

オリエンテーリング

グループ分けをスタッフがしたので嫌がる子どももいたが、実際にオリエンテーリングが始まるとグループで楽しそうにしていた。身体を使って活動するものから絵を書くだけで済む活動を取り入れ、いろいろな子どもが活躍できる場を設けた。結果、子どもたちは楽しそうに一つ一つの活動に取り組んでいた。しかし、中学生の子どもには簡単な活動もあったので退屈したグループはオリエンテーリングをせずに、途中から自分たちで遊びだしてしまった。

まとめの活動

子どもたちは二日間を振り返りながら、共に過ごした仲間のいいところを見つけ書いている姿が見られた。書く作業のときはほとんど話をせずに取り組む子どもたちが多かったように思う。また、自分の長所が書かれたメッセージカードを配られた時には、それを熱心に読んでいた。仲間のいいところを見つけるだけでなく、自分のいいところも再発見でき、今後の自信につながったのではないかと思う。

(2) 夏の活動全体を通しての結果と成果

夏の活動は子どもたちが自分たちで考え行動する機会を多くしたことで、そのなかでもリーダーシップをとる子どもや、班の中でもいい意見を出す子ども、口数は少ないが誰も気がつかないことに気づきやり始める子ども、男女隔てなく接しコミュニケーションを図る子どもなど、各々のいいところが見えたことが成果としてあげられる。また自由に活動できるため、子どもたち同士が彼らの言葉で話をする、一緒に遊び始めるといった姿が見られたことから、子どもたちが交友関係を広げその中でも関係を密なものにしていったようだ。

またキャンプファイヤーでは自分の思いを口にすることができた子どもがいたほかに、その子たちの話を聞いて、日本語が苦手なのは自分だけではない、自分はひとりではないと気づくことができた子どももいるようである。このようなことに気づくことは日常生活のなかではなかなか難しく、つながる会という外国にルーツを持つ子どもが集まっている場であるからこそできたことだと思う。子どもたちの心のなかにあることを引き出し、また参加者とその思いを共有することが

できたこともこの夏の活動の成果であると言える。

そのほかに子どもたちと関わるなかで、つながる会の参加者の中には学校の学習に困難を感じている子どもが少なくないことがわかった。事前活動のときやキャンプ当日でも学校の宿題を持参し、わからないところを友達に聞いている子どもが何人かいた。また、自分は日本語が下手である、ということをお口にする子どももあり、その子たちは自分の日本語能力を気にして自信を持ってないのではないかと思った。

また、今回新たに見えてきたことは、以前は日本語も中国語も話すことができていた子どもが、日本での生活の中で中国語に触れる機会が減り、中国語を話すことが難しくなっているということである。このようなことは子どもたちのアイデンティティにどうかかわってくるのか、これからそれに対する支援の方法についても考えていくきっかけになるはずである。この発見も一つの成果であるといえる。



子どもたちが書いてくれた感想

2. まなびの会の結果と成果

子どもたちは、朝から夕方までという長いスケジュールではあったが、冬休みの宿題や3年生は受験勉強など、集中して取り組んでいたようだった。中には、目標を決めて一つの課題を二日で完成さ

せた子どもや、冬休みの宿題の残りをすべて終わらせた子どももいた。私たちが思っている以上に子どもたちの学習へのモチベーションは高く、得意科目に関してはかなりの学力が見受けられた。

二日目は間にレクリエーションを入れ、子ども同士の関係を作る機会を設けたりした。子どもたちの息抜きにもなり、楽しんでいただけたようだった。二日目になると、集中力が落ちていた子どももいたので、パズルなどで学習から離れ、切り替えをする配慮もした。

今回の学習活動で気づいたことは、子どもたちの苦手分野が同じ傾向であったことだ。ほとんどの子どもは、国語、特に漢字が苦手なようだった。実際に漢字が読めなくて、数学の問題でつまづく子どもがいた。漢字の読みを教えただけでスラスラ解けるということがあった。また、参加した子どもとの会話の中で、「社会は漢字がたくさん出てくるからわからない。漢字でつまずいているうちに、どんどん授業が進んでいく。」と言った話も聞くことができた。

第4章 まとめや反省、今後の展望など

1. 反省点

(1) 夏のキャンプの反省点

夏のキャンプでの反省点は、私たちが考えた活動内容が対象である中学生に合っていないのではないかとということである。というのも、さまざまな言語能力のレベルを持つ子どもたちが一緒にできる遊びを考えると、ノンバーバルなものにするほかなく、そうなる遊びの内容が小学生の楽しめそうなものばかりになってしまっていたのだ。さまざまな言語レベルを持つ子どもたちが集まる中でも、みんなが満足できる遊びを考えていくことが今後の課題である。

(2) まなびの会の反省点

一つの同じ部屋で学習、学習支援をしていたため、席が離れていても他の人の声が聞こえてきてしまい、集中できないという参加者がいた。また、スタッフが集中力のない参加者に声をかけ過ぎてさらにやる気がなくなってしまっていたということもあった。支援方法や声かけの仕方に改善の余地があった。

2. 今後の展望とまとめ

つながる会に参加してくれる子どもたちはそれぞれ異なる背景をもっている。言葉も性格も歩んできた歴史も違う子どもたちが、つながる会に来て互いに認め合いつながりを作り、さらにそのつながりが会を重ねるごとに強まっていくのはとても喜ばしいことだ。そんな子どもたち姿をみていると、違うということがいかに素晴らしく、可能性の秘めたものであるかを思い知らされる。これからも外国にルーツをもつ子どもたちが集い、つながりを作れる場所を提供していきたい。